

教材研究と教材の扱い方 (32)

——『ぬすびと面』(吉橋通夫)——

菅原敬三

一

『ぬすびと面』(日学図国語722)を取り上げたい。中学校の教材としてもはや定着した感がある。テーマ性、作品としての面白さなど、評価の高い作品として、長きに亘って教科書に収録されている。

ただ危惧されるのは、平易な文章で、事件の展開も簡明であるために、簡単に扱うと「易しさにつまずく」。簡単に扱うと、小説を読む面白さが失われてしまう。易しい作品であればあるほど、広い視野からの教材研究や深い読みと工夫のある展開に心掛けなければならない。

小説教材を扱う場合、まずは「小説を読むことの大切さと面白さ」を生徒がどれだけ分かっているか、再確認する必要がある。少子化が叫ばれる現在、生徒の経験知だけでは、人間理解が乏しくなる。「人間の絆」が希薄になった現代だからこそ、「小説を読む意義」について、しっかりと押さえておきたい。

「小学校から中学校、また高等学校に亘って、小説を読むのはなぜだろう」と授業前に問うのも良い。「小説なんて読んでも読まなくても一緒だ」と「読んでも読まなくても何も変わらん」と考え違いをしている生徒もいるかもしれない。同時に「小説なんて簡単に扱えばよい」と考えている教師もいるかもしれない。互いにあつてはならないことである。こういう考えは、長い人生を考えると、大きな財産を失うことになる。

二

少々長いが、全文を引用する。(段落は論者の判断で設定した)

文吉は、腕組みをしたまま仕事場にぼつねんと座っている。

もう三日も、そうやって座っている。

目の前に八寸ほどのひのきの古材こぞうが置いてあり、そばには、研ぎ上がったノミが並べてある。そのノミを使つてひのきに向かえばいいのだが、いっこうに手が出ない。「ぬすびと」の面が打てないのだ。

この春、壬生みづぶの大念仏で、「山端やまはなとろろ」という狂言を新しく演じる。その狂言に使うぬすびとの面が、どうにも打てない。

文吉は、能面を作る面打ち師だ。

能面は、新しい顔の面をつくるのではなく、これまでに使われてきた古い能面をそのまま写し取るように彫つていく。

そつくり同じであればあるほど、面打ち師の腕がいいことになる。

たまに狂言の面を打つこともあるが、やつぱり決まつた顔の古い手本があり、それと同じものを彫ればよい。

ところが、ぬすびとの面というのは、能面にも狂言面にもない。

まだ、誰も打つたことがないのだ。

眉をぐいと寄せ口をうむと引き結んだ能面や、わに口を横に開いてすごみのある目でらんでいる狂言面など、ぬすびとらしい面があるにはあるが、「山端とろろ」で使うにはふさわしくない。

「山端とろろ」は、壬生の人々が新しく考え出した狂言で、

——名物とろろを食わせる山端の茶店に忍び込んだぬすつとが、客から着物などを盗んでいるところを下男に見つかつて、とろろを塗りたくられ、手が滑つて刀は抜けないし足は滑つて転ぶし、あげくの果てに頭からとろろのすり鉢をかぶせられ、何も取らずに逃げていく——

という話である。

ぬすつとばかりか客や店の者まで、とろろに足を滑らして大騒ぎするところを、身ぶり手ぶりでおかしくやろうというのだ。

「山端とろろ」のぬすつとは、どこか滑稽で間が抜けている。それでもやはり、ひと目見ただけで人が震え上がるような顔をしていなければならぬ。

そんなぬすびとの面を打ちたいのだ。(第一段)

この三日の間、文吉の頭の中でいくつもの顔が、浮かんでは消えた。

自分の顔にひげを生やしたようなものから、隣の平さんがどなっている時の顔や、果ては、女房にようぼうのおふじが怒った時の顔まであった。

だが、これだ——というものがどうしても浮かんでこない。

彫る顔が自分の頭の中にはつきり焼きつかない限り、ノミのひと打ちさえできない。

でき上がった面の形や色、表情の細かいところまで思ひ浮かべることができるようになってこそ、初めてノミを下ろせる。

文吉は、面打ち師としてはまだ若い方だが、打つ面の評判は良く、自分でもやつと自信が出てきたところだ。名高い人々に少しでも近づこうと、懸命に励んでいる。

ところが、軽い気持ちで引き受けたぬすびと面がなかなか打てない。

約束の日が近づいたので、「さつさとやつてしまおう。」と木取りをしてノミを並べてみたが、そのまま一歩も進まない。

手本のない面を打つことが、これほどしんどいとは思わなかった。よっぽど投げ出してしまおうかとさえ考えたが、面打ち師の意地がそれを許さなかった。

それに、このしんどさを抜け出ることができたら、何か新しいものがつかめるような感じが、かすかにあった。

お寺の鐘が九つを告げた。

「ああ、今日もだめやったか——。」

文吉は、組んだ腕をほどいて、うーんと伸びをした。

奥の六畳では、女房のおふじがまだ起きているらしく、明かりが漏れている。

一緒になつて七年になるが、子供はいない。

文吉はそれほど欲しいとは思わなかったが、おふじはずいぶんあちこちのお寺や神社へお参りに行つたらしい。

しまいには縁結びの神様や、目病み地藏さんにまで足を運び、効き目が現れないので、三年前にすっかりやめてしまった。

それからは、お寺とか神社と名の付く所には決して行こうとせず、いくら誘つても、正月の初詣までしなくなつた。(第二段)

文吉は立ち上がつて、もう一度伸びをして六畳へ声をかけた。

「おふじ、ぼちぼち寝よか。」

「はあい、今片づけます。」

障子を開けて仕事場に入ってきたおふじは、木くずが一つも落ちてないのを見ると、そのまま黙つて土間へ下り、入り口の戸を確かめに行つた。

おふじは文吉の仕事に口を出さないが、でき上がった面を見せて、

「どうや?」

ときくと、

「あら、これ亡くなつたお父さんの顔に似てるわ。」
などと言つて、文吉をひやつとさせる。

手本とそっくりのものを彫つたつもりなのに、自分のよく知つている顔が、知らぬうちに面の中に現れてくるらしい。

おふじが戸締りを確かめて戻りかけると、忙しく戸をたたく音がした。

「今頃誰やろ？」

すぐには戸を開けず、閉めたままできいた。

「どなたはんでつしやろ。」

すると、男の低い声が慌てたように早口で答えた。

「開けてください。助けてください！」

助けてください——という声に、おふじは迷わず戸を開けた。

とたんに、ぬつと背の高い男が入つてきて、後ろ手で戸を閉めた。

薄暗がりの中で、男の手にぎらつと刃物が光った。

「きやつ、ぬすつとや！」

おふじは、下駄をはね散らして仕事場へ飛び上がり、文吉の背中にしがみついた。

ぬすつとが、低いおどろおどろした声で言った。

「騒ぐな。」

文吉は、体がすくんで何もできなかった。ノミを使つ

てるから刃物には慣れてるはずなのに、気持ち動転してしまつて、どうすればいいか分からなかった。

「座れ！」

言われたとおりおふじをかばいながら座つたが、目を刃物から離さなかった。よく切れそうな包丁だった。

おふじが「あつ。」と小さく叫んだ。

「赤ちゃんや——。」

ぬすつとの背中に、おふじひもで赤ん坊が背負われている。

「騒ぐな、子供が起きる。」

ぬすつとは、二人の目の前で包丁を振り回し、ゆかにガツと突き立てると、しゃがんでおふじひもをほどき、器用に赤ん坊を前へ抱き取った。

そして文吉の方へ、ぐいと突き出した。

「取れ。」

文吉は、「えつ。」という顔をしてしりぞきをしたが、ぬすつとは、構わず赤ん坊を突き出した。

「はよう、取れ！」

仕方なく文吉がおずおずと手を差し出すと、ぬすつとは、赤ん坊を押しつけるようにして抱かせた。

すると、眠つていた赤ん坊が「あうん。」とぐずつて顔を振った。

すぐにおふじが抱き取つてあやすと、おふじの胸に

顔を寄せて、安心したようにまた小さな寝息を立て始めた。(第三段)

それを確かめてから、ぬすつとは床の包丁を抜いて低い声で言った。

「その子を、お前たちの子供として大切に育てろ。もし、捨てたり、ひどい目に遭わせたりした時には、これだ——。」

ビュッと二人の目の前で包丁が音を立てた。

「たとえわしが獄門台の露と消えようとも、地獄の底からじつと見ているからな。」

ぬすつとは、うむと緊張つて二人をにらみつけた。

それは、思わず震え上がるような恐ろしい顔だった。

「は、はい。」

慌てて両手ついて頭を下げたが、次の瞬間、文吉は、はじめたように顔を上げた。そして、ぬすつとの顔を改めてまじまじと見つめた。

ぐい^{ぐい}と寄せた太い眉は、先の方がびんと跳ね上がり、目は天狗のように鋭く光り、たくましい鼻はみごとに盛り上がり、横に広がり、引き結んだ大きな口には、すさまじいほどの力強さがみなぎっている。肌の色は日に焼けてあくまで黒い。

それは普通の人間の顔ではなかった。

文吉は、その顔の隅から隅までなめるように見て

いった。すると、うむと緊張つた恐ろしい顔の裏に、もう一つの別の顔があるような気がしてきた。

反対にこちらから「わあつ。」と脅かしてやると、とたんにぷつと吹き出してしまうような、なんとも滑稽でおかしな顔が隠されているような気がした。

——これや、この顔や！

文吉は、ひたとその顔をにらみつけた。

どんな小さな表情も見逃さず、全てを盗み取つてしまふかのように——。

するとぬすつとは、妙な顔をしてすつと後ろへ下がった。

追いかけて、文吉が顔を前へ突き出す。ぬすつとはのけぞるようになって、後ろへ下がる。負けずに文吉が前へ出る。

とうとうぬすつとは、ぶいと目をそらして立ち上がった。

「その子を頼むぞ。」

低くそれだけ言つて、さつと戸口へ走つた。

「ま、待て、待てくれ。」

文吉の声に振り向きもせず、戸を開けて外へ出た。

慌てて文吉は、はだしのまま土間へ飛び下り、後を追つて表へ飛び出した。

「頼む、もういっぺん顔を見せてくれえ。」(第四段)

(本文一行あき)

赤ん坊は、瘦せていたが元気でしつかりしていた。生まれて半年ほどらしく、しきりに寝返りをうち、となりの平さんのおかみさんの乳をうまそうにコクコク飲んだ。

文吉は、この子をどうするか迷っていた。

あのぬすつとが、なぜこの子を預けていったのか分からない。

足手まといになるのだったら、殺してしまう方がいいかも知れぬすつとらしく思えるのだが、わざわざ預けに来た。

しかも大切に育てろという。こちらに育てさせておいて、大きくなったらさつさと連れ戻し、ぬすつとにするつもりかもしれない。

もしそうなら、育てるだけあほらしい。

それにこれから先、あのぬすつとがこの家を見張っているというのが、どうにも気味悪い。ひよつとしたらたまに子供の顔を見に包丁持って押しかけてくるかもしれない。

いつそ奉行所へ届けようかと思ったが、捨て子と見なされたら同じことだ。

捨て子は、捨てられた町内で責任を持つて育てなければならぬ。となると、子供のいない文吉の家で引き取れと言われそうだ。

おふじは、早速さらしを買ってきておむつを作り、平さんのおかみさんに食べ物のことなどをこまごまときいている。

赤ん坊は、ぬすつとの父親とは、これっぽっちも似ていない。ごく普通の顔で、むしろ整った目鼻立ちをしている。

文吉は、もう一度じっくりと、ぬすつとの顔を思い出してみた。

その顔は、思い出しているうちに少しずつ変わっていき、ぬすつとのそれとはやや違うものになっていった。

額は大きく飛び出し、つりあがつた眉と眉の間には深く太いしわがくつきりと刻まれ、眉の下には鷹のような鋭い目がらんらんと光っている。鼻は顔の端から端までいっばいに広がり、真一文字に引き結んだ口を盛り上がった顎が支えている。

見るからに恐ろしいが、相手を怖がらせようとして精いっぱい気張っている顔だ。

それは「山端とろろ」のぬすびと面にびつたりの顔に見えた。

文吉は、とりあえず赤ん坊をおふじに任せてノミを握った。(第五段)

(本文一行あき)

その仕事は楽しかった。

今までは、どちらが手本の面でどちらが文吉の面か分からないほど、そっくり同じものを彫ることに喜びを感じていた。

だが、このぬすびと面の場合は違う。

己の頭の中に思い描いた顔を、自由に彫っていくのだ。彫っていくうちに、最初考えたものと少しずつ変わっていった。

その変わっていくのが、「違う、こうや、この方がええ。」というふうに、自分で納得ができた。

ノミをどう動かせば力強い線が出るのか、小刀でどうくれば柔らかい線が出せるのかを、自分の手がおもしろいほど覚え込んでくれた。決まりきった動かし方ではなく、

自由に使い方をするこゝによって、面の表情がどんなに生きてくるかが分かった。

最後に、目と口を丁寧に仕上げて彫り終わった。それから地塗り磨きを繰り返した後で、目を鬼神

の面のように金色にし、口に朱色を塗った。

できあがった面を見たおふじは、「あつ。」と叫んで顔を背け、こわごわ横目でみていたが、そのうち「くすつ。」と笑って楽しそうに眺め始めた。

——うまくいった。

文吉は口もとをほころばした。

(本文一行あき)

やがて壬生大念仏狂言の始まる日が来た。

この日、壬生寺では、延命地藏菩薩に供えた山吹の花を御所と奉行所へ届ける。

奉行所では六角牢屋敷に竹矢来を組んで特別の場所を作り、山吹を掲げて囚人たちを集める。

囚人たちは、閉ざされた牢の中から明るい光の中に、出て花を拝み、壬生寺の、

ガンデンガンデンガンデン

という大鐘と太鼓の音を聞きながら、仏の心を教えられる。

一面の菜の花畑の中にぼつんと浮かんで見える壬生寺へ、一人で向かっていた文吉は、ふとその囚人たちのことを思い出して家へ引き返した。

もしあのぬすつとが六角牢屋敷に捕えられていた

ら、赤ん坊を見せてやることができる。

赤ん坊はおふじによくつき、こしやくにも、この家にいるのが当たり前だという顔をして居座っている。

「おい、ひよつとして、お前の親父おやじに会えるかもしれないぞ。」

文吉は何やらうだうだ言っている赤ん坊をおふじに抱かせて、六角牢屋敷へ急いだ。

そこには囚人の知り合いたちがつめかけ、見張りをしている役人たちの目を気にしながら、それとなくお互いの顔を確かめ合っていた

中には、やつれ果てた囚人の姿を見て、たもとで顔を覆って泣き伏す者もいた。

文吉は、それらの人に交じりながら、竹矢来の外からあのぬすつとの顔を探した。

普通でない顔というのは、実に探しやすい。

ぬすつとは、やはり捕まっていた。あの時のようにうむと口を結んで、囚人の間に座っている。

文吉は、その顔を何とも言えないなつかしさを込めて見た。

おふじも気づいたらしく、いちばん前に出て、ぬすつとによく見えるように赤ん坊を両手で高く抱き上げた。

ところがぬすつとは、僅かに目を向けただけで、何の関わりもないという顔をして、そのままうむと気張って座っている。(第六段)

拍子ひょうし抜けした文吉が、竹矢来の外で見張っている役人に恐る恐るきいた。

「ちよつとお尋ねいたします。あのいちばん後ろの、右から三番目にいる怖い顔をした男は、どんなおとがめを受けますのやろ?」

「ああ伝蔵でんざうか。あれは――、ちよつと分からぬな。」

「と申しますと?」

「うむ、変わったことをやりおった。」

「何を盗みましたんやろ。」

「盗んだのではない。配って回ったのじゃ。」

「えつ。」

「聞きさされそうになった子供を助けて、育ててくれそうな家へ、無理やり押しつけて回ったのじゃ。」

文吉は、一瞬ぼかんとした。

あまりにも貧しすぎる家では、生まれた赤ん坊を殺してしまうことがあるし、不作などで食う物がなくなると、小さくて弱い子供を捨ててしまったりする。

それを聞き引ひぎぎという。

あの男は、そんな子供たちを助けていたというのだ。文吉は、伝蔵と呼ばれたその男を改めてみた。

伝蔵は、相変わらずうむと口を結んで、眉をつり上げ、かつと目を開いて何かをにらんでいる。

文吉は、今初めて分かった。

あの恐ろしい顔は、相手を脅すためではない。

この世の、どうしても許しておけないことを、怒りを込めてにらみつけているのだ。

子を間引く親だけでなく、それを許している世の中の人、みんなをにらみつけているのだ。

文吉は、自分の心の中にもにらみつけられているような気がした。

菜の花畑のむこうから、

ガンデンデンガンデン

と、壬生大念仏狂言のおはやしが聞こえ始めた。

風に乗って笛の音も、かすかに流れてくる。

文吉は、あの「ぬすびと面」をもう一度彫り直そうと思った。(第七段)

二

この教材は、一見易しく見える。しかし、作品としての完成度も高く、込められたテーマもかなり重いものがある。国語科の学習材として、考えなければならぬものは何であろうか。試案も交えながら考えてみたい。

第一段

【試案1】

次の文章は、教材本文の文章を改変したものである。読んでいただきたい。

(A)

文吉は、腕組こみみをしたまま仕事場にぼつねんと座っている。

もう三日も、そうやって座っている。

目の前に八寸ほどのひのきの古材こざいが置いてあり、そばには、研ぎ上がったノミが並べてある。そのノミを使ってひのきに向かえばいいのだが、いつこうに手が出ない。「ぬすびと」の面が打てないのだ。

この春、壬生みぶの大念仏で、「山端やまはなとろろ」という狂言を新しく演じる。その狂言に使うぬすびとの面が、どうにも打てない。

(B)

能面は、新しい顔の面をつくるのではなく、これまでに使われてきた古い能面をそのまま写し取るように彫っていく。

そっくり同じであればあるほど、面打ち師の腕がいいことになる。

たまに狂言の面を打つこともあるが、やつぱり決まった顔の古い手本があり、それと同じものを彫ればよい。

(C)

ところが、ぬすびとの面というのは、能面にも狂言面にもない。

まだ、誰も打つことがないのだ。

眉をぐいと寄せ口をうむと引き結んだ能面や、わに口を横に開いてすごみのある目でにらんでいる狂言面など、ぬすびとらしい面があるにはあるが、「山端とろろ」で使うにはふさわしくない。

(D)

「山端とろろ」は、壬生の人々が新しく考え出した狂言で、

——名物とろろを食わせる山端の茶店に忍び込んだぬすつとが、客から着物などを盗んでいるところを下男に見つかって、とろろを塗りたくられ、何も取らずににげていく——という話である。

ぬすつとばかりか客や店の者まで、とろろに足を滑らして大騒ぎするところを、身ぶり手ぶりでおかしくやろうというのだ。

「山端とろろ」のぬすつとは、どこか滑稽で間が抜

けている。それでもやはり、ひと目見ただけで人が震え上がるような顔をしていなければならぬ。

そんなぬすびとの面を打ちたいのだ。

改変したといつても、「文吉は、能面を作る面打ち師だ。」という一文を抜いて、AとDの記号を付しただけのことである。しかし、この一文の持つ意味は大きい。効果を考えさせてみたい。

表現というものは、どのようなものであれ、必ずその効果を要求する。生徒に、どの箇所に入れるのが自分ではふさわしいと思うか、考えさせたいのである。正解を求めるのではない。生徒各人が、AとDのどこに入れるのがふさわしいと思うか、そして、なぜそこに入れるのが良いと思うのか判断を求めるのである。それを考えることは必然的に表現の効果について考えることになる。結果的には、本文のようにBに入れる者が多くなることが考えられるが、

・なぜ、Bが良いのか？

・なぜ、生徒の多数がBがふさわしいと考えたのか、その理由は何だろうか？

という問いを用意するのも良い。

このAとDのどこに入れるのがふさわしいかを考える作業は、第一段の読解を生徒自身が行うことになる。そして、AとDを選んだ理由をそれぞれの生徒に説明させ、その判

断を廻つて意見交換を行えば、それだけで教師が求める読解のレベルに達するであろう。それでも、不足するところがあれば、意見交換の後で教師が新たに問いを発したり、不足した点を補えば良い。

本文の一文の持つ意義や効果を考えることが、生徒に「表現の効果」に対する認識を深めさせ、また教師にとつては「理解と表現の関連指導」を考える契機になる。

Bがふさわしいもつとも大きな理由は、前の文の「どうにも打てない」との対比である。プロの面打ち師でありながら「どうにも打てない」という対比から、芸術の深さや芸術家の哲学やこだわりを捉えさせたい。

【試案2】

この本文を読んですぐ気付くのは、「まるで舞台の幕開けの場面ようだ」ということである。

文吉役俳優が、「八寸ほどのひのきの古材や研ぎ上がったノミ」を前に、肩を落とし、ため息をついている場面が浮かび上がる。そこにナレーションが入る。これが本文であり、このナレーションを舞台にふさわしいように行うのである。

舞台やナレーションを設定し、班を作つて、班内で文吉役とナレーションを担当する役を決めていくのである。文吉の演技指導とナレーションを朗読の形をとつて練習を行

う。また、実際に発表の場を設定するとすれば、もつとリアルになる。その際、国語の授業であることに意識させ、文吉役は本文のどこを生かすように演技しようとしたか、またナレーション役の生徒には、何に注意して朗読しようとしたか、具体的には間の取り方や強弱の使い方、抑揚、スピードなどを注意点として事前に押さえておきたい。

本来、朗読は教材の全ての内容を理解した上で行わなければならないのだが、この作品の場合は、冒頭部分だけでもできそうである。それほど本文が完成されているということだろう。

【試案3】

一般的な授業展開を考えてみたい。

【目標】

- 1 能面を作る面打ち師の文吉が何に苦しんでいるのか、苦しみの実態を捉える。
- 2 表現の特徴として、舞台の幕開けを想像させるような書き方になっていることに気付く。
- 3 「文吉は、能面を作る面打ち師だ。」の一文の位置に注目し、その効果を考える。
- 4 傍点や「」、ダッシュ、また、一文の長さ、改行の多さなどの工夫に気付かせ、その効果について考える。

〔板書〕

第一段

文吉の苦悩

・能面は、決まった顔の古い手本があり、それと同じものを彫ればよい。

・能面は、そっくり同じであればあるほど、腕がいいことになる

能面は、新しい顔の面を作るのではなく、古い

能面をそのまま写し取るように彫っていく

能
面

ぬすびと面

まだ、だれも打ったことがない狂言面。

「山端とろろ」――壬生の人々が新しく考え出した狂言

盗みに入った盗人が、下男に見つかり、

とろろを塗りたくられ、

さんざんにひどい目に遭わされ、ぬすつ

とばかりでなく、客や店の

者までとろろにすべり、大騒ぎとなる。

ぬすつとは何も取らずに逃げていく。

どうにも打てない。

なぜ打てない、その理由は？ どの程度の

苦しみか？

言語事項

強調 「いっこうに――ない」

「どうにも――ない」

「あればあるほど」

「――や傍点

説明、補い――ダツシュ

表現

・書き出しの工夫

・改行の多さ――視覚的效果、意味の把握をたやすくする、リズム

第二段

どうしてぬすびとの面が打てないのか、その理由は第2段で説明されるのだが、ここでは、理由を想像させる「想像読み」を試すのも一案。面が打てない苦悩、ここでは「どうにも打てない」、「まだ、だれも打ったことがないのだ」という表現をこの段階では押さえるだけでよいであろう。

この第二段は、この教材を読解する上でかなり重要な位

置を占めている。芸術家としての文吉の哲学や内面と深く関わるからである。文吉の苦悩は、それを物語る。徹底的に面打ちにこだわっている。簡単に作品を制作しようとはしない。そこを十分押さえなくてはならない。

【試案1】

第一段の末部の次の文章は、第二段でも必要な部分なので、生徒に断った上で扱いたい。

「山端とろろ」のぬすつとは、どこか滑稽で間が抜けている。それでもやはり、ひと目見ただけで人が震え上がるような顔をしていなければならぬ。

そんなぬすびとの面を打ちたいのだ。

【目標】

1 文吉の制作上の苦悩ぶりを捉える。

2 なぜ、「ぬすびと面」が打てないのか、制作者としての文吉の哲学やこだわりの実際を捉え、芸術家や芸術に対する自分自身の認識を深める。

3 強調表現やつなぎの言葉の効果を理解する。

【板書】

「山端とろろ」の面——矛盾した条件

- ・どこか滑稽で間がぬけている。
- ・一目見てふるえ上がるような顔

文吉の苦悩

彫り師としての文吉の評価

・まだ若い方だが、評判はよい（世間の評価）

・自分でもや々と自信が出てきたところだ（自己評価）

彫り師としての信念（哲学・意地）

・彫る顔が自分の頭の中にはつきり焼きつかない限り、ノミのひと打ちさえできない。

・でき上がった面の形や色、表情の細かいところまで思い浮かべることができるようになつてこそ、初めてノミを下ろせる。

→ ところが——何と何を結んでいるか？

文吉の苦悩の実際

1 軽い気持ちで引き受けたが、なかなか打てない。

2 この三日の間、頭の中でいくつもの顔が浮かんでは消えた。だが、これだというものがない。

3 約束の日が近づき「さっさとやつてしまおう」と思うができない。しかも投げ出すこともできない。

面が打てない理由

手本がない——手本がないことが、これほどしんどいとは思わなかった。

面打ちを投げ出さなかった理由

このしんどさを抜け出ることができたら、何か新しい

いものがつかめるような感じがかすかにあった。

おふじの姿

- ・ 文吉の支え・支援
- ・ 子供を授かる努力——叶わず

【試案2】

中学校国語課の授業としては、少々冒険の意味を持つが、古典の作品との関連指導を考えてみたい。この第二段の扱う時に、高校の古典の教科書の導入に利用されている『宇治拾遺物語』所収の「絵仏師良秀」の話を利用する。

古文の文章をそのまま持ち込むのは避けねばなるまい。口語訳したものを用意する。

また、漢文の教材として、平易なものとして「推敲」などを採用するのも面白い。

古典と併せて扱うのは、「芸術家」の芸術に打ち込む姿、情熱、彼らが最も重視した考え・価値観などを学ばせるためである。良秀の常軌をはずした判断や行動は、毒を含み、扱いに注意を要するが、芸術家の自尊心や価値観や情熱などを学ぶことができる。芸術作品の制作に関しては、古今東西時代を超えて共通する要素があることを理解させることができる。

第三段

この段の扱いは、文吉一家に事件が発生する。その事件を中心に据え、その前後で問題点を整理することが必要で

あろう。「強盗の入る前」と「入った後」が問題設定の視点である。黒板の真ん中に「強盗」を据え、右に「(強盗の入る前」、左に「入った後」が位置する。

発問としては、「この段では、文吉一家に大きな事件が起こる。その事件の前後では状況が一変する。その事件とは何か」を用意する。平易すぎる発問ではあるが、それであるのである。生徒に第三段の中心になるものが意識されるのが大切であり、そこがスタートとなる。

【目標】

1 文吉の家に強盗が入ることが大事件であるが、単なる事件ではなく、文吉に多大な影響をもたらす。その意味を捉える。

2 強盗が家に入り込むことができたのはなぜか。強盗の言葉の効果を考える。

3 強盗の要求の不可解さを捉える。

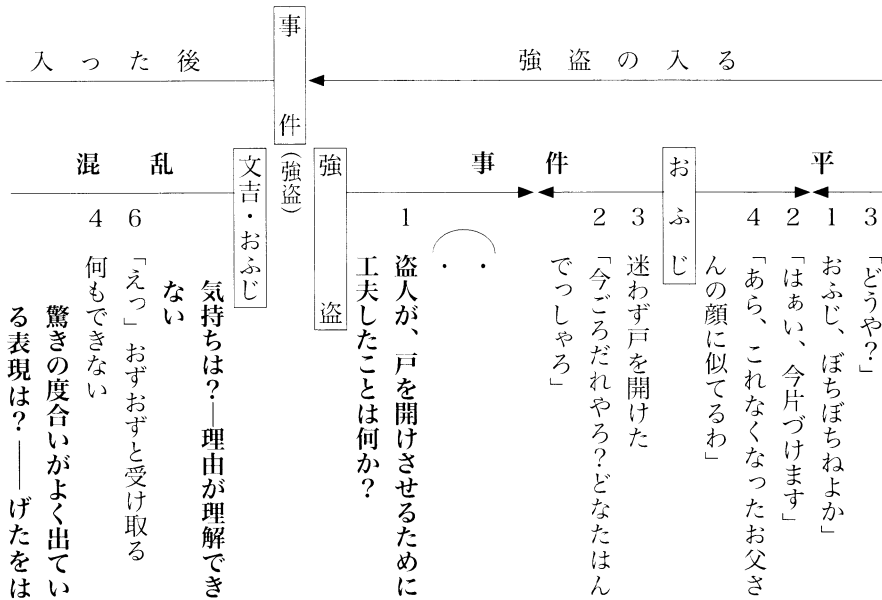
【板書】

文吉

理由——自分のよく知っている顔が知らぬうちに出てくる

気持ち——驚き・落胆

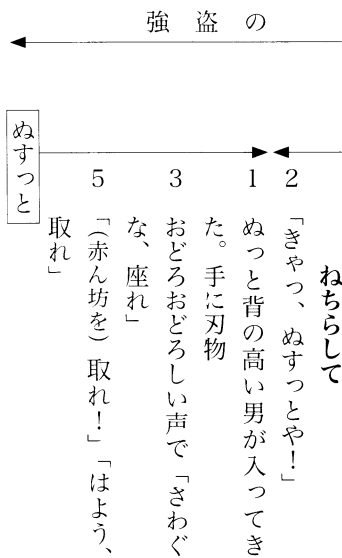
前 和 5 (おふじの言葉を、どう聞いたか?)



第四段

この段では、ぬすつとに二面性（二つの顔）があることに気付いた文吉の思いを、丁寧につまえる作業が重要である。「なぜ、文吉はぬすつとに二面性があることに気付いたのか」、その理由を尋ねることが大切となる。

「次の瞬間、文吉は、はじめられたように顔を上げた。そして、ぬすつとの顔を改めてまじまじと見つめた」とある。盗人の顔の描写が続く、その後に「文吉は、その顔のすみからすみまでなめるように見ていった」。文吉の発見の驚きを「はじめられたように」、「改めてまじまじと」、「すみからすみまでなめるように」とリアルな表現がなされている。このあたりを丁寧に押さえる必要がある。最終的に「——これや、この顔や！」と求めていることが手に入つた喜びがどれほどのものであつたか、生徒から「面の制作に苦労



してきた文吉の喜び」を説明させたい。

おふじには、ぬすつとに二面性があることは発見できない。文吉は、なぜそれが発見できたのか、その理由を読み取ることができなければ、『ぬすびと面』を読む醍醐味は薄れてしまう。来る日も来る日も、日夜精神を集中し「怖さと間抜けさという矛盾する条件を満たす顔は、どのように制作するのがよいか」を悩み抜いたからこそ、発見できたのである。文吉の鋭敏な感覚が養われていたのである。それが盗人の二面性（二つの顔）を発見させたのである。「制作者の苦しみと歓び」を押さえなければならない。

【目標】

1 恐怖の内にありながら、文吉がぬすつとに「二面性」があることを発見したことを捉える。

2 なぜ、「ぬすつとに二面性（二つの顔）」があることに文吉が気付いたのか、ぬすびと面の制作と関連付けて考える。

3 ぬすつとと文吉の関係が、後半逆転する面白さを味わう。

【板書】

「ぬすつとの二面性＝ぬすつとの二つの顔」

1 ぬすつと——ふるえ上がるようなおそろしい顔

文吉・おふじ

2 「は、はい」両手をついて頭を下げた。

2

ぬすつと——なんとも滑稽でおかしい顔

ぬすつと

1 「その子を、お前たちの子として育てよ。」

「思わず震え上がるような恐ろしい顔

文吉

4 もういつペン顔を見せてくれえ

3 前に出る

なぜ、ぬすつとに二つの顔があることが分かったか？

これや、この顔や

なめるように見ていった

すみからすみまで

まじまじと見た

1 次の瞬間、はじかれたようにぬすつとの顔を

2 みような顔をして後ろに下がる

4 のけぞるようになって後ろへ下がる

ぬすつと

・ぐいと寄せた太いまゆ・目は天狗のようにするどく光り

・たくましい鼻・引き結んだ大きな口・肌

／＼の色——あくまで黒い

その奥に——なんとも滑稽でおかしな顔

第五段

この段では、文吉の「押しつけられた子の養育に対する迷い」と面の制作に関する話と二つの柱で成り立っている。話の内容からいえば、第五段、第六段を合せて2時間扱いということも考えられよう。

「押しつけられた子の養育に対する迷い」については、文吉とおふじの対応は異なる。この違いも大切にしなければならぬ。

【目標】

1 ぬすつとに押しつけられた子の養育に悩む文吉の姿と文吉とは異なるおふじのを捉える。また文吉の悩みの原因も考える。

2 以前と違って、ぬすびと面の制作に対する文吉の気持ちの変化を捉える。

【板書】

I「押しつけられた子の養育に対する文吉とおふじの対応」
文吉——迷い

いくつの点で、迷いが見られるか？

- 1 ぬすつとがこの子を預けていったか、理由が分かるか。

足手まとい——殺した方が良い

結びつかない

文吉夫婦に「大切に育てろ」と要求

2 子供が大きくなったら、ぬすつとが連れもどしに
来るかもしれない。

3 奉行所に届けても結果は同じ——自分たちが育
てることになる。

4 赤ん坊は、ぬすつとの父親とは、これっぽっちも
似ていない。

おふじ——子育ての喜び || 母性本能 = 子供に恵まれ
ないことが解消

おむつを作り、近所のおかみさんに食べ物のこと
をこまごまと聞く。

II「ぬすびと面の制作」

1 彫り師としての文吉の信念

彫る顔が自分の頭の中にはつきり焼きつかないか
ぎり、

ノミのひと打ちさえできない。

2 文吉は、もう一度「じっくりとぬすつとの顔を思い出
してみた。」

実際の顔とやや違うものになっていった。
なぜ違うものとなっていったのか？

3 めすつとの面の制作（第二次制作）

「山端とろろ」の面にぴったりの顔に見えた。

第六段

【試案1】

【目標】

- 1 手本の無い面を作る文吉の喜びを捉える。
- 2 めすつとに赤ん坊を見せようと思った文吉とおふじの
思いの違いを捉える。
- 3 赤ん坊を見せた文吉夫婦に反応しないめすつとの思い
を捉える。

【板書】

I めすつと面の制作

手本の能面
＝そっくりー喜び
自分の能面

能面

めすつとと面——楽しい 彫り師としての新しい学び

- ・自分の頭の中に思い描いた顔を自由に彫っている
- ・ノミを自由に動かす
- ・面の表情が生きてくる

II 壬生大念仏狂言の始まる日

1 赤ん坊をめすつとに見せに行く

- ・面白いように彫れる
- ・うまくいった！——思わず口もとがほころぶ
- おふじの評価も高い

文吉 おふじ

なぜ、赤ん坊をめすつとに見せようと思ったか？

・

めすつと——六角牢屋敷（やはりつかまっていた）

2 赤ん坊をめすつとに見せる

文吉 おふじ

どのような気持ちで見せようと思ったか？

文吉——めすつとと面の制作に示唆を与えてくれた人物だから、感謝の意を含ませて

おふじ——赤ん坊を大切に育てている

・

なぜ反応しない

反応せず

めすつと

〔試案2〕

この段には、内容理解に大きく作用する言葉が使用されている。「文吉は、その顔を何とも言えないなつかしさを込めて見た」という表現の「なつかしさ」である。その重大さを生徒に気付かせたい。

「なつかしさ」を空欄にしたプリントを用意し、生徒に配る。空欄補充にふさわしい言葉をできるだけ多く示す。

- ① なつかしさ
- ② 寂しさ
- ③ 腹立たしさ
- ④ せつなさ
- ⑤ 喜ばしさ
- ⑥ いわれなさ
- ⑦ おぼつかなさ

などである。これらから一つの言葉を選ばせる訳だが、そこには語彙指導と読解力の養成というねらいを含ませている。

グループを作って、班内での討議を行わせると、生徒同士の読みの交換にもなって効果的であろう。

第七段

この段では、彫り師としての文吉の成長を把握することが大切となる。

〔目標〕

- 1 めすつとの正体を知った文吉の驚きを捉える。
- 2 めすつと（伝蔵）の行動（犯行）は文吉に多大な影響を与えた。その内実を考察し、価値を考える。

〔板書〕

I めすつとのつかまった理由

文吉

- 3 「瞬ぼかんとした」――思いがけない犯行
- 1 めすつとの罪を聞く

役人

- 2 つかまった理由の説明

2

① めすつとの行動（犯行）は文吉に大きな影響を与えた 文吉の何が

- ・ めすつと（伝蔵）に対する思い
- ・ めすみに対する思い
- ・ めすびと面の制作への思い
- ② どう変わった？

- ・ 単なるめすみではない。人間の生命を大切に思う思いがあつたことに気付く
- ・ めすみの裏に「人道主義」があつた。
- ・ この世のどうしても許しておけないこと
 - ・ 子を間引く親
 - ・ それを許している人間
- ・ めすびと面には、人間的深みを込めることが大切と分かった。

もう一度、彫り直そうと思った

どういう面ができそうか？（第二次制作）

会があれば、補足したい。

（本学名誉教授）

『ぬすびと面』の授業は難しい。簡単に扱えば「易しきにつまずく」。生徒が本気で取り組める課題づくりに教師は努めなければならぬ。作品の展開が簡単になればなるほど、細かな言葉の読みや内容の深い理解が、教師には求められる。

また、教材には挿絵が使用されている。この利用も読解には不可欠な条件である。注意したい。

また、多角的にグループ活動を導入したり、すべての教育活動が終了した時に、教師が朗読を行うのも一案であろう。その際、音読、通読、朗読の違いを生徒に向けて説明するのも欠かせない。朗読は、作品の全ての理解や語句の効果や表現の工夫などが分かった上で行わなければならない表現活動であることを生徒に十分理解させたい。

紙幅の関係で、教材分析を詳述することはできなかった。

また、具体的な発問も記すことができなかった。いつか機